

デスカンファレンスによる終末期看護に対する看護師の行動の変化

キーワード：がん患者、終末期看護、デスカンファレンス、看護師、行動

○牧野あゆみ¹⁾、本間昭子²⁾
新潟市民病院¹⁾、新潟青陵大学²⁾

I 目的

終末期を生きるがん患者と家族が、絶望の中から前向きに一日一日を意義あるものにしていくことは、簡単な事ではない。望みをつないで治療を続ける患者を前に、終末期看護に比重を移すタイミングを図るのは難しい。そこで、終末期看護のあり方を見つめ直し、看護師の実践力を高める取り組みが求められる。その手段にデスカンファレンスの導入を試み、経験年数の違いによる看護師の行動の変化を明らかにすることを研究目的とする。

II 方法

1. 対象：A病棟看護師14名。新卒者4名、5～9年目看護師4名、10年目以上の看護師6名。
2. 方法：デスカンファレンス初回（2011年6月）から15回実施後（同年12月）に無記名のアンケート調査。
3. デスカンファレンスの方法：死亡退院後10日以内に受持ち看護師が主催。日勤終了後30分程度。内容は疼痛コントロール、精神面への配慮、家族ケアの3点に項目を設定し、看護介入とその結果を検討後、専用データシートへ記述し、参加出来なかった人は閲覧した。
4. 倫理的配慮：新潟市民病院臨床研究倫理審査委員会の承諾を得た。対象者に研究目的・方法・参加の自由を文書で説明し、承諾の署名を得られた人を対象とした。

III 結果

回収は14名全員より得られ、結果を図1に示す。

薬剤使用後の疼痛緩和の確認行動が出来るようになった6人は、新卒者全員と5～9年の2人、出来ないままは5～9年の1人である。医師との話し合いが出来る

ようになった4人は、5～9年の2人と10年以上の2人で、医師と話し合える9人は10年以上の全員と5～9年の3人で、新卒者4人はできないままだった。疼痛コントロールに対する意識の向上も、同じ変化であった。

患者の思いや悲しみの傾聴が出来るようになった7人は、新卒者全員と5～9年の3人であり、変わらずに出来ているは5～9年の1人と10年以上の全員である。家族からの相談が出来るようになった5人は、新卒者全員と5～9年の1人である。10年以上の6人全員は変わらずに出来ていると回答した。スタッフ間の話し合いは、新卒者と5～9年の全員が出来るようになり、10年以上の6人全員は変わらずに出来ていると回答した。

IV 考察

疼痛緩和は終末期看護の優先課題であり、新卒者全員が疼痛緩和の反応を確認出来るに変化した。疼痛コントロールを医師と話し合えるのは、新卒者を除いてほとんどであり、全員がスタッフ間の話し合いが出来ると認識する中で、新卒者をフォローしながらチームで疼痛緩和が出来る体制に変化したと推測できる。「出来ないまま」は新卒者が中心で、経験不足からの自信のなさや専門的知識の不足が考えられる。心理面のサポートに加え、終末期看護の専門性を体系的に学ぶ環境が必須である。

また、精神的ケアの中で死に行く患者の思いや悲しみを傾聴することは、最も難しいケアである。人生の最後に関わる責任のある仕事という使命感を持たなければ、できないケアである。新卒者さえも出来るようになったと認識するには、デスカンファレンスで精神面への配慮、家族ケアを中心に話し合われた結果、各々が看護を振り返り、考えを共有し、学びの場となり、次の終末期看護に生かすことにつながった成果と考える。

V 結論

デスカンファレンスへの参加は、がん患者の終末期看護の意識が高まったと推測できる看護師の具体的な行動の変化が見られた。5～9年の看護師も約半数に行動の変化があり、10年以上は高いままと継続している。

